

# 高橋虫麻呂の「不尽山を詠む歌」

—山部赤人歌への意識—

錦 織 浩 文

## 一 「右一首」の解釈と研究史

『萬葉集』卷三雜歌の部、山部赤人の代表作として有名な「不尽山を望る歌」のすぐあとに、次の歌がある。

不尽山を詠む歌一首并せて短歌

I なまよみの甲斐の国 うち寄する駿河の国と こちこちの  
国のみ中ゆ 出で立てる不尽の高嶺は 天雲もい行きはば  
かり 飛ぶ鳥も飛びも上らず 燃ゆる火を雪もて消ち 降  
る雪を火もて消ちつつ 言ひもえず名づけも知らず くす  
しくもいます神かも せの海と名づけてあるも その山の  
堤める神ぞ 不尽川と人の渡るも その山の水のたぎちぞ  
日本の大和の国の 鎮めともいます神かも 宝ともなれ  
る山かも 駿河なる不尽の高嶺は 見れど飽かぬかも (3  
三一九)

反歌

II 不尽の嶺に降り置く雪は水無月の十五日に消ぬればその夜

降りけり(三三〇)

III 不尽の嶺を高みかしこみ天雲もい行きはばかりたなびくもの(三三二)

右の一首は、高橋連虫麻呂が歌集の中に出づ。類をもちてここに載す。

右のI—IIIの歌については、次のような問題がある。第一に、題詞には作者名が記されていない。一方、左注には「右の一首は、高橋連虫麻呂が歌の中に出づ」(右一首高橋連虫麻呂之歌中出焉)とあり、歌の出所が示してある。しかしながら、『萬葉集』において左注に「右一首」とある場合、それは、直前の一首をさすのが慣例となっている(1—13—5左注など参照)。一方、複数の歌をさす場合には、たとえば、

死にし妻を悲傷しびて、高橋朝臣が作る歌一首并せて短歌

白栲の袖さし交へて 靡き寂し我が黒髪のみ ま白髪になり  
なむ極み 新世にともにあらむと 玉の緒の絶えじい妹と  
結びてしことは果たさず 思へりし心は遂げず 白栲の

手本を別れ にきびにし家ゆも出でて みどり子の泣くをも置きて 朝霧のおほになりつつ 山背の相楽山の 山のままに行き過ぎぬれば 言はむすべせむすべ知らに 我妹子とさ寝し妻屋に 朝には出で立ち憊ひ 夕には入り居喚かひ 脇ばさむ子の泣くごとに 男じもの負ひみ抱きみ 朝鳥のねのみ泣きつつ 恋ふれども験をなみと 言とはぬものにはあれど 我妹子が入りにし山を よすかとぞ思ふ (三四八二)

#### 反歌

うつせみの世のことになればよそに見し山をや今はよすかと思はむ (四八二)

朝鳥のねのみ泣かむ我妹子に今またさらに会ふよしをなみ (四八三)

右の三首は、七月二十日に、高橋朝臣が作る歌なり。名字いまだ審ひらかにあらず。(以下略)

というように、「右の三首」と記すのが『萬葉集』における慣例となつていようである。

これによれば、当面の「右の一首は、高橋連虫麻呂が歌集の中に出づ」という左注は、Ⅲの歌に限定してほどこされて見なくてはならない。そこで、契沖『萬葉代匠記』は、

詠不尽山歌并短歌 此歌作者見エス。其由モ注セヌハ作者未詳ト云コトノ脱タルカ。但上ノ赤人ノ歌ニ一首ト云ヒ、下ニ

右一首高橋連等ト断レハ、注セサレトモ作者シレサル事顯ル、故歟。譬ハ物ノ十アランニ九ツニシルシヲシツレハ一ツハシルシナキヲ以シルシトスルカ如シ。

とし、ⅠⅡは作者未詳、Ⅲは「虫麻呂歌集」所出と捉えた。従来の注釈書の多くは、この説に従つていゝ。

この説によれば、『萬葉集』卷三には、はじめに作者未詳の長反歌ⅠⅡが並んで存在した段階があり、その後、「虫麻呂歌集」所出の短歌Ⅲが追加され、その折に、今見るような注が付されたことになる。が、『萬葉集』卷三が作者名を記す歌巻であることを思えば、Ⅲの歌が追加される以前の段階で、ⅠⅡの長反歌に対して作者に関する記載が何もなくかつたといふことは考えにくい。

『代匠記』にいうとおり、その場合には、「作者未詳」などの注記がほどこされるべきである(三四九題詞脚注、三四四二左注など参照)。さらに、「虫麻呂歌集」所出歌の他の歌すべてに題詞があることを思えば、Ⅲの歌に限つて題詞がないのはなぜか、といふ疑問が残る。

そこで、もう一つの説、すなわちⅠⅢの三首すべてを「虫麻呂歌集」所出とする説が顧みられる。佐佐木信綱「和歌史の研究」(一九一五年)は、「右一首」は「右三首」の誤りかとするが、しかし、「右一首」は諸本一致した書き方であり、誤字説は避ける方がよい。それで、澤瀉久孝「萬葉集—詞章研究」(国語国文の研究第四十九号、一九三〇年)は、この「右一首」は、Ⅰの長

歌をさしたもので、ⅡとⅢの短歌二首はその中に含まれる、と説いた。これについては早々に、山田孝雄「萬葉集の左注なる「何首」と書せる事の意義」(国語国文第二卷第二号、一九三二年)の反論があつたが、これをうけて、澤瀉久孝「萬葉集注釈」(一九五八年)は、次のように再説している。

殊に中大兄三山歌(一・一三)の如き、反歌二首の左に「右一首」とあるのは明らかに最後(一五)の一首のみである事は疑ふ余地なき事である。(中略)それが通例であることは私も認めているのである。たゞものには例外があるので、今の場合と巻五卷末の場合とはそれであると私は云つたのである。題詞に長歌を主として何首といふ慣例があるのだから左注の場合にもその慣例に従ふ事があり得ると私は考へるのである。

「注釈」は、「右一首」で長歌Ⅰをさす書き方を「萬葉集」中の例外として扱い、説明している。そこに問題があるようだが、菅野雅雄「虫麻呂の富士山の歌」(「セミナー」万葉の歌人と作品 第七卷)和泉書院・二〇〇一年)は、巻三左注の様相を押さえて、巻三では、左注を題詞に対応して背くという原則が貫かれていることを指摘し、「右一首」で長歌Ⅰをさす不尽山歌の左注の書き方は、題詞「不尽山を詠む歌一首非せて短歌」に対応して、巻三の原則になつてゐる、とする。先に「萬葉集」中の例の一つとしてあげた高橋朝臣の歌(三四八―三)の左注「右の三首」は、

のちに追補されたことによつて引き起こされた書き方で、むしろ、これが、巻三の中では例外であるという。

かくして、Ⅰ―Ⅲの歌にまつわる本文と左注の様相からして、澤瀉説の妥当性は高いと考えられる。歌の表現、内容の面からも、この見方を補強する説がある。たとえば佐佐木信綱「和歌史の研究」は、大きく、Ⅰ―Ⅲ三首に「虫麻呂が風格」が感じられると説き、たとえば「注釈」は、長歌の表現を考察して、冒頭に枕詞を使つた地名を重ねること、指示代名詞「その」の反復、「ごちごち」の使用など、この長歌に「虫麻呂らしい特色」が認められることを指摘している。また、Ⅲの歌には、Ⅰの歌と同一の句「天雲もい行きはばかり」が用いられている。「注釈」は、この点を重視し、「長歌の一節を採つて反歌としたものである。これを以つても共に同じ作者虫麻呂のものであることが考へられる」と述べている。「天雲も」と同一の句は、ⅠとⅢの歌を除けば、集中ほかに、巻十六・三七九一番の歌にしか見られない。「い行きはばかり」は、ⅠとⅢの歌のほかには、前掲赤人の三一九番の歌のみに用いられている。ⅠⅢ二首における「天雲もい行きはばかり」の対応は、Ⅰ―Ⅲの三首を一連の作と見る上で、たしかに有効な一証とならう。

近年の研究状況は、慎重な態度をとりつつも、Ⅰ―Ⅲの歌すべてを高橋虫麻呂の作品ととらえる方向が強まりつつある<sup>2)</sup>。筆者もまたこの見方に与する。本論は、その理由を示すべく、Ⅰ―

Ⅲの歌に共通する内部的な特色を指摘し、その特色が生み出された要因について言及するものである。

## 二 不尽山頂の雪

はじめにⅠの長歌を見る。Ⅰの長歌については、山部赤人の不尽山歌(331七~八)と比較して論じられることが多い<sup>3)</sup>。

二つの歌の相違の一つとして、構図の取り方、すなわち、不尽山のごくに焦点を当ててうたっているか、という点をあげることができ。この点については、西宮一民『萬葉集全注 卷第三』

(一九八四年)に、「前の赤人の歌は富士山頂に焦点を当ててゆく手法をとったが、この作では土台から山頂へ、再び広大な山裾へと立体的な構図をとっている」という指摘があるけれども、その指摘のとおり、この長歌は、

① 土台をうたう＝冒頭から「出で立てる不尽の高嶺は」まで

② 山頂をうたう＝「天雲もい行きはばかり」から「くすしくもいます神かも」まで

③ 山裾をうたう＝「せの海と名づけてあるも」から「室ともなれる山かも」まで

という三つの観点から不尽山をたたえており、その点、赤人の歌と対照的であるといえる。山部赤人の歌は、周知のとおり、不尽山頂の雪に焦点をしばりこんでいる。

山部宿禰赤人、不尽山を望む歌非せて短歌

天地あめつちの分かれし時ゆ 神さびて高く貫き 駿河なる不尽の高嶺を 天の原振り放け見れば 渡る日の影も隠らひ 照

る月の光も見えず 白雲しらくもも行きはばかり 時じくぞ雪は降りける 語り告げ言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は(331七)

### 反歌

田子の浦ゆ打ち出でて見ればま白にぞ不尽の高嶺に雪は降りける(311八)

こうした構図の取り方ということにかかわるけれども、もう一点、本論に注目される相違がある。それは、不尽山頂の雪のうたい方の相違である。

赤人の長歌は、「渡る日」「照る月」「白雲」のたたずまいを叙しつつ、最終的に「時じくぞ雪は降りける」と、不尽山頂に降り積もった雪に焦点をしばる。さらに、反歌において、「ま白にぞ」とその色彩を具体的にうたい、山頂の白雪を視覚的に印象づけている。赤人の不尽山歌は、題詞に「不尽山を望る歌」とあるとおり、まさしく不尽山頂の白雪を望見する歌である。

それに比べると、当面のⅠの長歌は、不尽山頂の雪に対する扱ひ方がずつと軽い。この歌において、山頂の雪について触れているのは、第二段の「燃ゆる火を雪もて消ち 降る雪を火もて消ちつつ」の四句に限られる。しかも、その四句は、観念的な表現で、

実際の光景を写し取ろうとしたものではない。

ここに「燃ゆる火」とあるのは、万葉の時代、不尽山が噴煙をあげていた事実に基づいていると見られる。このことは、当時広く知られていたらしく、『萬葉集』にもほかにそれを題材にした歌が三首ある（Ⅱ二六九五・二六九七と或本歌）。「燃ゆる火を雪もて消ち 降る雪を火もて消ちつつ」の四句は、当時広く知られていた噴煙と、山頂に降り積もる雪という、不尽山にまつわる代表的な事象を取り上げ、かつ、お互いに打ち消し合うように組み合わせた対句表現と認められる。このようにうたうたうたによって、Ⅰの作者は、「火」と「雪」という二つの事象の相克が間断なく繰り返されることを表現し、不尽山がもつ神秘性を強調しようとしたものと思われる。

このように、赤人の歌は、不尽山頂の白雪を視覚的に映し出しており、Ⅰの長歌は、不尽山頂の白雪を視覚的に映し出していない、という相違がある。この相違は、続く反歌Ⅱにも同様に当てはまる。

Ⅱの反歌は、次のとおり。

不尽の嶺に降り置く雪は水無月のもちに消ぬればその夜降り  
けり

この歌については、仙覚『萬葉集註釈』に、「富士ノ山ニハ、雪ノフリツモリテアルガ、六月十五日ニ、ソノ雪ノキエテ、子ノ時ヨリシモニハ、又フリカハルト、駿河国風土記ニミエタリト云

へり」とある。この歌は、そうした土地の伝承に基づいてうたわれていると考えられる。歌の意は、「不尽の頂に降り積もる雪は、六月十五日に消えるとその夜のうちに降るということだが、そのとおりだ」というように理解される<sup>26)</sup>。

このⅡの歌も、長歌Ⅰと同じく、不尽山頂の雪を取り上げてはいるけれども、しかし、山頂の白雪を視覚的に印象づけようとしているわけではない。このことは、南信一『萬葉集駿遠豆 論考と評釈』（一九六九年）に詳しく、

山頂の雪が、酷暑の盛りである六月十五日に消えてしまうと、すぐ夜降るのは、その山が神山であるからという考えが根底にある（巻十七の「立山に降り置ける雪を常夏に見れどもあかず神からならし」——四〇〇一の歌をよき傍証とすることが出来る）。赤人は写実に徹して巖峰不尽を詠い、これはこの山の神性をとらえて酷暑不尽を詠ったということが出来る。この歌に赤人の歌におけるとき色彩感（白雪も「真白にぞ」が全くないのも、こうした対象のとらえ方にかかっているといえよう。

と説くとおりである。

Ⅱの歌は、長歌Ⅰの第二段「燃ゆる火を雪もて消ち 降る雪を火もて消ちつつ」とは観点が異なるものの、降っては消え、消えては降るといふ不尽山頂の雪の神秘を対句的にうたうことによって、不尽山をたたえた歌であり、その意味において、長歌Ⅰと同

じ方向性をもっているということができよう。

Ⅲの歌はどうか。

不尽の嶺を高みかしこみ天雲もい行きはばかりたなびくもの  
を

このⅢの歌もまた、ⅠⅡ二首と同じく、不尽山頂の雪を視覚的に映し出していない。結句「たなびくものを」の「ものを」は、逆接の意を表すことが多いけれども、ときに感動・強調の意を表すことがあり、ここはその例に属すと考えられる。荒木田久老「萬葉集概乃落葉」に、「このをを、よといふに同じく、よび捨てたるをなり」とあり、「注釈」に賛意を表して、「この「ものを」は「ことよ」といふに近い」と述べている。また、木下正俊「ものを」覚書（『萬葉集研究 第三集』一九七四年）に、「萬葉集」における「ものを」全般について考察した上で、「作者もおそらく「たなびきにけり」などとほとんど同じような気持で用いたのではないか。鎌田氏（注、鎌田広夫「助詞「ものを」について— 天草本平家物語を中心に—」語学文学第八号）が示した四種類の、「四、単に感動、強調、確認等の意を表わす」というのは、このような場合によく当てはまる。こうしてモノヲは上代においてすでに終助詞と認むべき用法を持っていたのである」と説いているのが参考になる。

したがって、一首は、「不尽の山が高くて恐れ多いので、天雲さえも行くのをためらって、ほら、あんなにたなびいているでは

ないか」という意と認められる。一首は、不尽山の高さや神聖をたたえた歌ではあるけれども、不尽山頂の雪そのものを「見た」という感動を表出しない。視覚的に捉えられ、うたわれているのは、むしろ、たなびく雲である。

Ⅲの歌がかようなうたい方になっていることについては、従来、あまり注目されなかったように思われる。けれども、このことはⅠⅡⅢを一連の作と見る立場にとって加えるところがあるのではなからうか。以上見てきたように、ⅠⅡ二首は不尽山頂の雪を視覚的に捉えてうたっていないという点で共通性をもっている。Ⅲの歌もまた同様である。この共通性は、偶然に生まれる性格のものではないように思われるからである。

いったい上代に限らず、不尽山といつてまさきき思い浮かぶのは、白雪をいたたく不尽の雄姿ではなからうか。たとえば、「常陸国風土記」（筑波郡）には、

古老の曰へらく、昔、神祖の尊、諸神たちの処に巡りいでまして、駿河の国福慈の岳に到りて、つひに日暮に遇ひて、遇宿を請欲ひたまひき。この時、福慈の神答へて曰ししく、「新粟の新嘗して、家内謹忌せり。今日の間は、粟はくは許し堪へじ」とまをす。ここに、神祖の尊、恨み泣きて告りたまはく、「すなはち汝が親ぞ。何ぞ宿さまく欲りせぬ。汝が居むる山は、生涯の極み、冬も夏も雪ふり霜おきて、冷寒さ重襲り、人民登らず、飲食食ることなけむ」とのりたまひき。

(中略)ここをもちて、福慈の岳は、常に雪ふりて登臨るこ  
と得ず。

という伝承がある。あるいはまた、「萬葉集」には、

逢へらくは玉の緒しけや恋ふらくは不尽の高嶺に降る雪なす

も(14三三五八の一本)

という歌がある。こうした伝承や歌から窺えるように、不尽山頂  
の雪は、当時においても不尽山の象徴として捉えられていた面が  
確かにある。作者の側に立つならば、不尽山をうたおうとしたと  
きに、まずもつてうたいたいのは、不尽山頂の白雪を「見た」と  
いうことではなからうか。事実、赤人は、不尽山頂の白雪を目に  
した感動をまっすぐにうたいあげている。

あるいはまた、大伴家持が立山をうたうときにも、

立山に降り置ける雪を常夏とよなに見れども飽かず神からならし

(17四〇〇一)

のように、立山山頂の雪を目にした感動を表出している。

不尽山を題材にしてうたおうとするときに、山頂の白雪を視覚  
的に表現せずうたうということは、それ相当の理由と意志を必  
要とするのではないか。不尽山頂の白雪を視覚的に表現しないと  
いう姿勢がⅠⅢの歌に共通して見られることは、ⅠⅢ三首が  
同一作者の手によつてなされ、その作者が統一的な意図をもつて  
うたつたことを物語っているように思われる。

思えば、Ⅰの長歌の前には「不尽山を詠む歌一首」とある。赤

人の不尽山歌の題詞には「不尽山を望る歌一首」とあり、これが  
歌の内容に照らしてふさわしいことはすでに述べたけれども、そ  
れと同じく、ⅠⅢ三首をくぐる題詞として「不尽山を詠む歌」  
とあるのは、不尽山頂の雪を視覚的にうたわなないⅠⅢ三首の表  
現性に照らして、ふさわしい。

かくして本論は、ⅠⅢ三首は、同一作者、高橋虫麻呂の手に  
よつてなされた一連の作であり、もともとの「虫麻呂歌集」にお  
いても「不尽山を詠む歌一首并せて短歌」という題詞のもとに連な  
つて存在していたものと見る。卷三編者は、「虫麻呂歌集」の中  
にこの一連の不尽山を詠む歌三首を見出し、「萬葉集」卷三・雜  
歌の部、赤人の不尽山歌のあとに「類を以て」収録し、題詞の記  
述と同じく、長歌をさす意をこめて「右一首高橋連虫麻呂之歌中  
出焉」と記したのであろう。

### 三 赤人歌と虫麻呂歌

以上、ⅠⅢ三首に共通する特色を指摘し、三首が虫麻呂の手  
になる一連の作品と見られることを述べた。この立場から、最後  
に、不尽山歌において虫麻呂はなぜ山頂の雪を視覚的に捉えてう  
たわなかつたかということを考えておく。

第一に考えられるのは、Ⅲの歌(第二反歌)の下句に「天雲も  
い行きはばかりたなびくものを」とあるとおり、虫麻呂一行が不  
尽山付近を通過したときに目にしたのは、不尽山を雲がすつかり

隠している光景だったのではないか、ということである。事の真相は、案外こういう単純な事情にあるのかもしれない。しかし、虫麻呂一行が不尽山付近を通過したその日に不尽山が見えなかったとしても、あるいは山頂に雪がない季節であったとしても、歌においては不尽山頂の雪を目にしたようにうたうことはできる。事実、『萬葉集』に「幻視」によつてうたわれた歌は多い（伊藤博「人麻呂における幻視」学燈社国文学第二十一巻第四号、一九七六年、『萬葉集の表現と方法 下』所収）。

そこで考えられるのは、虫麻呂が、先行する赤人の歌と同じうたい方になることを意図的に避けたのではないか、ということである。虫麻呂の歌と赤人の歌の先後関係は厳密には不明だけれども、『萬葉集』卷三の収録状況は、赤人の歌が先になされていたことを物語る。また、赤人が聖武天皇周辺の歌人になつたのは、和銅七年（七一四）頃（伊藤博「トネリ文学」日本文学第十五巻第一号、一九六六年、『萬葉集の歌人と作品 上』所収）。一方、虫麻呂の不尽山歌は、通説によれば、藤原字合とともに常陸に下つた養老三（七一一）頃の作と捉えられる。こうした実情を考慮しても、赤人の歌が先になされたと思ふべきゆとりはある。

虫麻呂には、不尽山歌のほかにも、赤人の歌と同じ題材を取り上げてうたった歌がある。赤人の「勝鹿の真間娘子の墓を過ぎる時の歌」（三四三二―三）に対する、真間娘子伝説歌（九一八〇七―八）がそれである。赤人の真間娘子の歌は卷三挽歌に収録さ

れている。岡部政裕「高橋虫麻呂と田辺福麻呂」（『萬葉集大成』一九五四年）には、赤人歌の前に人麻呂の歌（三四二九―三〇）があり、うしろに和銅四年（七一二）の歌（三四三四―七）があることから、赤人の真間娘子の歌は和銅のはじめ頃の作と捉えた上で、虫麻呂の歌は、字合との関連で、養老三（七一一）頃の作と考えられるから、赤人作が先行してなされていたと見なされる、と説く。私見によれば、虫麻呂の真間娘子伝説歌が最終的に完成し披露されたのは天平四年（四三三）頃のことと考えられる（拙稿「高橋虫麻呂の東国伝説歌二首」『萬葉集研究 第二十五集』二〇〇一年参照）。であれば、赤人歌が先行してあつたことはほぼ確実といえる。

真間娘子伝説歌の場合にも、虫麻呂の歌と赤人の歌とは同じうたい方になつてはいない。一例をあげれば、赤人は、

勝鹿の真間の入江にうち靡く玉藻刈りけむ手児名し思ほゆ  
（三四三二）

というように、真間娘子の仕事に玉藻を刈ることであつたようにうたつてゐる。一方、虫麻呂は、彼女の姿を、

勝鹿の真間の井見れば立ちならし水汲ましけむ手児名し思ほゆ  
（九一八〇八）

というように、水を汲むことであつたようにうたつてゐる。口頭伝承の段階では、双方が真間娘子の姿として語られていた可能性があるけれども、結果として、二人の歌人のうたい方は、かやう

に異なったものとなっている。

赤人は、聖武朝宮廷歌人として、はなやかな場でうたうことが許された歌人であった。対して虫麻呂は、宇合の庇護をうけることはできなかったけれども、ついに宮廷歌人としてうたう榮譽を得ることはできなかった。いわば傍系の歌人である虫麻呂が、宮廷歌人である赤人に張り合うような気持ちで、赤人の歌を大いに意識しながら真間娘子伝説歌をなしたことは十分に考えられる。真間娘子の歌における両者の違いは、そうした虫麻呂の意識によつて導かれたところが大いではないか。

伊藤博「伝説歌の源流」(『国語国文第三十三卷第三号、一九六四年、『萬葉集の歌人と作品 下』所収)は、虫麻呂を伝説歌人へと傾かせた要因の一つとして、聖武朝宮廷歌人の金村や赤人に對する「心の陰影」「羨望の念」「はりあう気持」が考えられると説き、不尽山歌における赤人と虫麻呂の対立關係について、次のように指摘する。

「萬葉集卷三が、赤人の富士の歌と虫麻呂の富士の歌とを類をもつて配列しているのは、近江京都歌をめぐる人麻呂・黒人の歌と同様に、深く興味をそそる。(中略)赤人歌の伝統形式による讃歌性と虫麻呂のその型を破った叙事性とは、二つの作の間に、いかにも対立關係が存したごとくで、軽視できないものがある。

また、その後の、『萬葉集釈注』(一九九六年)にも、

はつきりしたことはもとよりわからないけれども、この兩作は、どちらかがどちらかを何ほどか意識して織りなされたのではなからうか。もしそうであれば、双方に登場する「白雲もい行きはばかり」(赤人)、「天雲もい行きはばかり」(虫麻呂)という相似た表現にも、目には見えぬ火花がひそんでいるかもしれず、対象のとらえ方や措辭の相違にはまた別の燃焼がひそんでいるのかもしれない。

前掲論文、『釈注』ともに、両者の先後關係は慎重に扱われているけれども、虫麻呂の歌が、不尽山の象徴、山頂の白雪を視覚的に映し出していないことを思うならば、この場合の両者の対立關係も、真間娘子の歌と同じく、赤人の歌が先にあり、その作を虫麻呂が意識したことによつてもたらされていると見てよいのではなからうか。

前述のとおり、赤人の不尽山歌は、不尽山頂の白雪を鮮やかに印象づけている。先行する赤人の歌と同じ趣向にならないようにして不尽山頂の雪をうたおうとすれば、どのようなうたい方になるか。そう思って虫麻呂の三首を見れば、長歌においては不尽山頂の雪を「燃ゆる火」との取り合せて観念的にうたい、第一反歌においては雪にまつわる土地の傳承をうたい、第二反歌においては山頂の雪を隠すようにたなびく雲の様子をうたっている。考え抜かれたうたい方というべきで、虫麻呂の苦心を窺うことがで

きるように思われる。長歌Ⅰにおける構図の取り方、すなわち土台をうたい、山頂をうたい、再び山裾をうたいという方法も、赤人と同じ趣向にならないように心がけた結果と見れば納得がいくように思われる。

細部について言えば、長歌と第二反歌において虫麻呂は、「白雲」ではなく、「天雲」の言葉を用いている。虫麻呂には「白雲」を用いた歌が四首あり(6九七・一、9一七四〇・一七四七・一七四九)、虫麻呂にとって「白雲」はむしろ愛好の言葉であったといえる。にもかかわらず、ここで、「白雲」ではなく「天雲」を用いたのは、虫麻呂の中に赤人作歌に対する意識が強くあり、同じ言葉を避けようとしたことに起因すると見なせよう。

虫麻呂の「不尽山を詠む歌」三首がもつ個性は、要するに、赤人の歌に対する意識から生み出されたところが大きいのではないかと考えられる。事は、真間娘子伝説歌にも同様である。山部赤人の歌の存在は、虫麻呂特有の歌の世界を切り開くのに、思いの外、重要な影響を与えたのではなからうか。

(一〇〇七・九・一九)

## 注

### (1)

西本願寺本、紀州本などの目録には、この歌の題詞の下に「笠朝臣金村歌中出」とあり、金沢本の本文にも、題詞の次行に「笠朝臣金村」とある。金沢本一本の本文に「笠朝臣金村」とあることについては、目録の記述に従ってのちに加筆された可能性が高く、資料的な価値は薄いと見てよいであろう(注釈)。一方、多くの写本の目録に「笠朝臣金村歌中出」とあることは、それなりの事情があったことを窺わせるけれども、目録の記述は、「萬葉集」本文の編者とは異なる人の手によってなされたものであり、この歌群の作者を考える上での第一等の資料とはなしがたい。Ⅰ―Ⅲ三首の作者についての考察は、実際にこの歌を収録した巻三編者の視点に立つてなされなくてはならない。Ⅲの歌の左注に「右一首高橋連虫麻呂之歌中出焉」とある以上、少なくともⅢの歌は、「虫麻呂歌集」所出の歌と見なし得る。この点は動かすべきではない。とすると、問題は、ⅠとⅡの歌が「虫麻呂歌集」の中に含まれるのか否かという点にしばらくは、「萬葉集」の写本の一つ、類聚古集に、題詞の下に「不録作者、若同赤人歌」と記すのをはじめとして、

三首とも作者不明(近藤芳樹『萬葉集註疏』)

三首とも柿本人麻呂か(橘守部『萬葉集拾遺抄』)

前二首は笠金村、後一首は虫麻呂(北村季吟『萬葉集拾遺抄』)などの説が見られるけれども、以上のことを踏まえるならば、取り上げるべきは、本文に掲げる二つの説と考えられる。

### (2)

次田潤『萬葉集新講』(一九二二年、佐佐木信綱『評釈萬葉集』(一九四八年)、新潮古典集成『萬葉集』(一九七六年)、八

木殿「高橋虫麻呂歌集について―不尽山歌の左注『右一首』」  
（大養孝博士古稀記念論集「万葉・その後」一九八〇年、西宮一民「万葉集全注」巻第三（一九八四年）、中西進「旅に棲む 高橋虫麻呂論」（一九八五年）、金井清一「高橋虫麻呂」（『和歌文学講座』万葉集Ⅱ一九九三年）、伊藤博「万葉集祝注」（一九九六年）などが「注釈」と同じ立場をとる。

(3) たえば、窪田空穂「万葉集評釈」（一九四八年）には、「赤人の歌は信仰であるが故に随つて詠嘆となつてゐるのに、此の歌は知性をまじへてゐる結果、自然説明的にならうとしてゐるのである」とあり、鈴木日出男「不尽山の歌」（『万葉集を学ぶ第三集』一九七八年）には、「一方が神の威力を思う叙事詩的な神秘妙霊の富士であるのに対して、他方は叙景として自然の深奥にふれた崇高美の富士であつた」とあり、村瀬憲夫「万葉びとのまなざし」（二〇〇二年）には、「赤人は「神さびて高く貴き」と歌つて、不尽山の均整のとれた姿そのままに、端正な取り澄ました感のする神性が漂う。対して虫麻呂は、「くすしくもいます」と歌つて、なまなましい靈妙な神性が漂う」とある。

(4) 結局「その夜降りけり」の「けり」については、大きく二つの解釈がある。「時代別国語大辞典 上代編」（一九六七年）には、過去の事実、過去から継続して存在した事実、または現在の事実を、その存在や意義や理由などが、いまにおいてはっきり認識されるにいたつた、という形で述べるのに用いる。

② ①のような意味からして、いまそのことに気づいたという詠歎・驚歎の気持を含めて述べるのに用いられることも多い。

③ 非体験の、伝聞した事実を述べるのに用いる。

と説明している。当面の歌の「けり」について、たとえば「古典大系」（一九五七年）は、「ケリは伝承を表現する助動詞。「昔男ありけり」「すぐれて時めき給ふありけり」等」と説明し、「時代別」にいう③の方向で解釈している。これによれば、口語訳は「その夜すぐ降るといふことだ」となる。一方、「古典集成」（一九七六年）は、「時代別」にいう②の方向で解釈し、「すぐその夜降るといふが、まったくそのとおりだ」と訳す。吉田茂晃「『けり』の時制と主観面―万葉集を中心として―」（『国語学』第百五十七集、一九八九年）は、「万葉集」における「けり」を、事柄の確実さを認定するための要素と把握することによって統一的に理解することができる、と論じている。この考察により、ここでは「古典集成」の解釈に従う。

(5) 清水克彦「赤人における叙景形式の変遷―仮称「原赤人集」の嚮造から―」（『萬葉第九十五号、一九七七年』『萬葉論集第二』所収）には、赤人の東国関係歌の製作年次について、その表現形式のあり様から、神龜元年（七二四）以前の作と推定されるとする。また、坂本悟幸「伝説歌の女性」（『高岡市万葉歴史館編「女人の万葉集」二〇〇七年）には、反歌の表現を比較考察して、虫麻呂の真間娘子伝説歌は赤人の歌を踏まえて作歌されたものであるとする。

（にしこおり ひろふみ 阿南工業高等学校准教授）